

を経て豊前に通じている。

要するに羽野天満宮・山田原は、まさに交通の要衝にあるのである。現在、この天満宮のすぐ西に大分自動車道日田ICがあるのも偶然ではあるまい。

そうしたことあつて、この羽野天満宮と山田原の周辺は淡窓・咸宜園、そして廣瀬家にとつて、いわば異郷への旅の見送りの場であり、迎えの場であつた。すなわち

・文政十年（一八二七）

九月二、謙吉、山陽ヨリ帰レリ。余、先考ニ陪シテ、門生ヲ引イテ羽野菅相寺ニ至リ、之ヲ迎ヘタリ。時ニ詩アリ。曰ク

忽傳豊北信。慰我倚門情。昨夜欣無寐。

今朝歩欲輕。稼収添野色。葉落減林声。

古寺閒相待。茶鐺幾度傾。

・天保七年（一八三六）

四月廿二日。謙吉、家ヲ発シテ東遊ス。早朝、膳ヲ設ケテ之ヲ饒ス。勲平、元可、尚賢、一郎之レニ関レリ。一郎ハ広島ニ遊フモノナリ。他ノ三生ハ謙吉ニ従フナリ。已牌、家ヲ発ス。予、久兵衛、仲平ト家人ヲ携ヘテ、行イテ送ル。奴牌ニ及フマテ二・三十人ナリ。羽野菅相寺ニ至リ飲饒ス。送ツテ村端ニ至ツテ別レタリ。塾生四十余人。送ツテ石坂ノ上ニ至ル。其中、敷輩ハ森実ニ至リ、尤遠キハ中津マテ至レリ。

右の天保七年の謙吉（旭莊）東遊の際の見送りは、淡窓と久兵衛、仲平のほか家人、奴牌に及ぶまで二・三十人という盛大なものであつた。そしてここで「菅相寺ニ至リ飲饒ス」とあるのも興味深い。この時は、塾生四十余人が、ここからさらに北の伏木峠にある「石坂」まで送り、さらにそのうち数人は森実（現中津市山国町）に至り、さらには中津まで送った者もあつた。

石坂石畳道（図1・57）

ここに見える「石坂」はいうまでもなく「石坂石畳道」（県史跡）のある石坂である。

石坂石畳道は、日田代官所と中津・宇佐四日市の陣屋を結ぶ往還の一部である。国道二・二号線の日田市市ノ瀬の石畳道の登り口から伏木峠まで全長一、二キロ。道の中央部分に堅い切石を敷き、左右に山の自然石を敷いている。この道は日田から中津へ通じる主要道路のひとつであつたが、岩や石の露出した難路だったため、嘉永三年（一八五〇）、隈町の掛屋・京屋作兵衛（山田常良）が周防山口の石工に依頼し築道した。道路完成の翌年、廣瀬淡窓が石坂改修の由来を漢文で撰し、隈町の森昌明の書で「石坂修治碑」という記念碑が建てられ、今も現地に残っている。

羽野天満宮・山田原をめぐる記事では、特に天保十二年（一八四一）の次の記事が、日田から小倉方面に向かう当時の里程を具に知ることができ、るものとして興味深い。すなわち、

八月二日。謙吉浪華ニ帰ル。余之ヲ送ツテ赤馬関ニ到ラントス。妻及婢壹ニ命シテ家ヲ守ラシム。塾政ヲ以テ慎治・祐之二人ニ託ス。範治従行セリ。（略）余、謙吉、肩輿ニ乗ル。三生歩行セリ。親族豆田町迄送ル。塾生ハ山田原ニ至ル。其中数人、大行寺マデ至リシ者モアリ。大行寺ハ山田ヲ去ルコト一里ナリ。又一里ニシテ宝珠山村ニ至リ、酒店ニ憩ヘリ。山田ヨリ此處マデ、八歳ノ時、宝珠山ニ詣テシ時ノ路ナリ。五十年ヲ隔テタル故ニヤ、道路山川ノ景象一モ記憶スル所ナシ。当時或ハ他路ヲ行キシモ料リ難シ。小石原ニ至リ、午飯セリ。家ヲ去ルコト六里ナリ。原ヲ過キテ山路ニ登ル。名ケテ柴峠トイフ。日田ヨリ小倉ニ至ルマデ第一ノ難處ナリ。此坂アルヲ以テ、官吏ノ往来、皆



石坂石畳道